

国語問題

〔問題一〕 次の各文の――を付けた漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (一) 部屋にじゅうたんを敷く。
- (二) 身支度を調える。
- (三) 次の撮影現場に赴く。
- (四) 出た損失の補填に注力する。
- (五) 稚拙な文章を書く。

〔問題二〕 次の各文の――を付けたカタカナの部分に当たる漢字を書きなさい。

- (一) ヨウサン業を営む。
- (二) 短歌集をアむ。
- (三) カイン的なテントを建てる。
- (四) 兄のサイリヨウに任せる。
- (五) エンジユクの域に達する。

〔問題三〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

このところマスコミを騒がせている最大の話題の一つは「①人工知能」だろう。人工知能(AI)と、それをロボットに載せるテクノロジーの知能化、あらゆる物をインターネットで結ぶ「*IoT」は、蒸気機関の発明、電力エネルギーの導入、コンピューターの応用について、「第四次産業革命」を起こすだろうといわれる。

最新の人工知能はただのコンピュータとは違い、自発的な判断力や感情まで備え、人間と同等か、それ以上の精神活動を行う能力を秘めている。工場労働をはじめとして、介護や医療の分野でも人間の代わりができるから、これで労働力不足の心配はなくなるという声がある。ある推計によれば、肉体労働、事務労働の八割が人工知能に委ねられると予想されるという。

労働を苦痛と感じる人は多いから、これを聞いて朗報と受けとるのが大勢となっている。未来学者はもちろん、テレビ・タレントでさえ「薔薇色」の時代がきたと囁したてるありさまである。だが少し待ってもらいたい。すでに思慮深い少数派が指摘しているように、この薔薇色の背後には失業と転職という深刻な問題が潜んでいる。

楽観論者は事態を軽く見て、事務や肉体労働の従事者は「創造的」な仕事に転職すればよいという。だがかりに本人がその気になっても、中年の事務職員がデザイナーや科学研究者へ転職することが可能だろうか。恐ろしい時間と努力が必要だが、その間の生活費と研修費用を誰が負担するのか。A楽観論者は職業観に偏見があつて、事務職員が仕事を愛し、それまで生きがいを感じて働いてきた事実を忘れている。

また考えれば脅威はさらに重大であつて、人工知能が究極まで進化すれば、人類の一〇〇%が失業する可能性もないとはいえない。「創造的」な仕事もロボットがすることになれば、人類は完全に自由になるが、しかし完全に無収入にもなる。そうなれば消費は皆無になるから、ロボットの従事する生産も無意味になってしまう。どうしても無人企業が生み出す収益を適切に分配し、余暇を楽しむ全人類を生活させる一種の共産主義が必要となる。

ところが従来共産主義が夢にすぎず、その過程の社会主義的分配が強権と官僚主義を招くことを、人類はすでに学んでしまった。②この弊を避ける知恵を現在の人間は持たないから、ここでも新しい深遠な英知を将来の人工知能に期待するほかはあるまい。

「創造的」な仕事を含むすべての仕事をロボットが行い、全人類が余暇を楽しむ夢のような社会は、果たして実現可能だろうか。その場合、ロボットが生み出した収益の配分も人工知能に頼ることになる。要するに平等や公正といった価値観も人工知能に育ててもらおうわけだが、そうなる問題は一段と次元を異にする困難を露呈するだろう。

いくら人工知能に自由に考えてもらおうといっても、その思考の出発点となる資料は現代の人類が入れるほかはなく、入れる内容は現代の価値観しかないという現実がある。人工とはいえ、知能は知能だから無から考え始めるわけにはいかず、必ず思想上の過去に縛られ、助けも受ける。

その縛りが二十一世紀前半の価値観であり、現時点までの思想の伝統であるとすれば、これは現代が未来を制約し、歴史を凍結することを意味する。

もちろん生きた人間も歴史の制約を受ける存在であり、どんな個人も幼少期に植えつけられた価値観を信じ、若干の修整を加えながら

も終生、それを引きずって生きてゆく。しかし反面、人間には死という冷徹な宿命があつて、この断絶のおかげで人類全体は歴史の変化に順応することができる。特定の時代の価値観がいかにも頑固であつても、それを信奉する世代が死ねば、後の歴史は格別の争いを起こすことなく自然に変わっていきける。

もはや念を押すまでもあるまいが、人工能にはこの死という断絶がなく、一時代の価値観を根底に抱いたまま永遠に生きるというところが問題なのである。ちなみに面白い事実だが、人工能の賛美者には不老不死を憧れる人が多く、むしろ逆に不老不死を実現するために人工能を求め論者が目立つ。

前に本欄でも紹介したレイ・カーツワイルが典型的だが、彼の『不連続点は近い』（邦訳『ポスト・ヒューマン誕生』）もこの夢を論じて、そのために③「非生物的人間」の創造を主張していた。方法は二つあり、身体に微細ロボット（ナノロボット）を注入して機械化するか、あるいは個人の全精神能力を知能ロボットに移管するかのどちらかだという。いずれにせよ、造られた非生物的人間は個人として永遠に生きるわけで、世代交代もなくなり歴史は凍結状態に入ることになる。

語るに落ちる笑い話だが、カーツワイルは迂闊にも自分の非生物的分身を造るにあたって、消化器官は要らないが皮膚は残したいと洩らしている。後者は性の快楽に必要だからというのだが、わかるのは彼が食欲より性欲に価値を感じているという事実だろう。ここでは未来の価値観が現代の制約を受けるところか、危うく一人の男の私的な価値観によって決定されようとしているといえる。

振り返って人類の歴史を見れば、そもそも価値の文明史はその内部に個人の死と世代交代を含み、伝承の流れに随時の断絶があればこそ発展してきた。断絶なくただ続くのは惰性的な因習であつて、④真の文化伝統は過去と現在の緊張した対決を内に孕む。

文化伝統には古典と呼ばれる今はなき価値があり、時間を隔てた継承者がそれを懸命に習得することで蘇る。この死と蘇生のリズムが文明史を造り、その根底には生物的人間の生のリズムがあつた。それを失つた非生物的な文明はどんな姿を見せるのだろうか。

たぶん死の恐怖のない個人は傲慢になり、知的能力を無限に拡張しながら、他の非生物的個人と競争を重ね、しばしば抗争を繰り返すだろう。その人数も無限に増えるはずだから、資源と環境の制約が解決されても、その居場所は宇宙にまで溢れるだろう。

忘れたはならないのは、数千億光年のこの宇宙にも法則があり、それは無数の星を生んでは滅ぼす生命的リズムだということである。

言うまでもなく、人工能の技術は有用、不可欠である。だが、それを研究し、それについて論じる人はもっと足を地につけたほうがよい。早い話が、完全自動運転車の開発に各社が狂奔しているなかで、老人運転者がアクセルとブレーキを踏み誤るといった、現存の技術で対応できる事故を防ぐ車がまだ普及していないのである。

（山崎正和『哲学漫想』より）

（本文に一部表記の変更があります。）

（注）IoT＝Internet of Things の略。これまでインターネットに接続されていなかったものが接続され、相互に制御する仕組み。

（一） A・B に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア（A） だから B しかし

イ（A） しかも B だが

ウ（A） ただし B そして

エ（A） たとえば B また

（二）——線部①「人工能」とありますが、本文中における「人工能」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 永久に生きられる存在で感情と判断力を備えうる一方で、その時代の人間が持つ価値観が組み込まれることで今後を制約させてしまう可能性のある技術。

イ 人間と同様の判断力・思考力があり、感情も豊かであるにもかかわらず、人間のあらゆる行動を抑制させてしまう恐れのある不老不死の技術。

ウ 不老不死で人間と同等以上の感情や判断力を有する可能性がある一方で、造られる際の人間の価値観に縛られることなく、人間が自由に生活していくことも上書きできる技術。

エ 人間以上の感情・判断力を有する可能性があり、造られる際の人間の価値観に縛られることなく、人間が自由に生活していくことを可能とする不老不死の技術。

（三）——線部②「この弊」とありますが、（こ）では具体的に何を「弊（よくないこと）」だと言っていますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あらゆる労働をロボットに任せ、人間は管理することだけに従事し自由に余暇を楽しむ生活が可能となる構造とは異なり、人間に平等に利益を分配することで生じる、一部の人間が支配層となる共産主義。

イ 人間がロボットに労働を任せ、余暇に勤しむ生活が常に可能となる構造とは異なり、ロボットが出した利益を人間に公平に分配する社会主義的構造から派生する、一部の人間に富が集中する共産主義。

ウ 労働の大半をロボットに委ね、人間は労働をほとんどすることなく自由に余暇を満喫できる生活をしていく構造とは異なり、多くの人間には平等に、一部の人間には多くの利益が分配される共産主義。

エ 人間が労働をロボットに委ね、利益分配で自由に余暇を楽しんで生活していく構造とは異なり、平等に利益を分配する社会主義的構造から生じる、強大な権限を一部の人間が有する共産主義。

(四) —線部③『非生物的人間』の創造を主張していた」とありますが、この主張が実現することでどのようなことになるかと筆者は考えていますか。次の文の□に入る最も適当なことばを、本文中から四字ずつで抜き出しなさい。

永遠の生命であるために □①□ ができず、歴史を □②□ にさせることになる。

(五) —線部④「真の文化伝統」とありますが、筆者はどういうものこそが「真の文化伝統」だと考えていますか。それを説明した次の文の□に入る最も適当なことばを、それぞれ本文中から、①は五字、②は八字で抜き出しなさい。

文明史の □①□ と、時間を隔てて継いだ人間が文化伝統を修めることで生じる □②□ で造られるもの。

(六) 本文の説明の仕方として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人工知能という技術の不安定さを挙げつつ、人間がどのように人工知能に適応していくのかを説明している。
- イ 人工知能という技術がどのような課題を内包しているのかを、人間の存在意義と照らし合わせて説明している。
- ウ 人工知能という有用な技術をどのように扱っていくのかを、身近な具体例を交えて批判的に説明している。
- エ 人工知能という優れた技術を持つ危険性を、現時点で人工知能が取り入れられている例を挙げて説明している。
- (七) 本文中で筆者は「人工知能」について、私たちにどういうことを理解してほしいと考えていますか。「歴史」ということばは用いず、に、「二時代の価値観」「発展」ということばを必ず用いて、五十字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題四〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

約五十年前、大学を出て銀行に勤める有田国政は、幼なじみでつまみ 簪 職人の源二郎から、小学校の先生である花枝という女性に恋をしたと聞かされ、駆け落ちをしようとした源二郎に協力することにしました。

若き国政と源二郎は、小船を操って * 荒川を渡り、 * 堀切がわの岸边につけた。月のうつくしい晩だったが、深夜だというのに蒸し暑く、黒い川面が油のようにぬめっていた。土手の草も、心なしかうなだれて見える。

今夜、花枝が家を抜けだし、源二郎のもとに来る手はずになっている。

有田家では十四日の昼間、自宅に僧侶を呼んで盆の読経してもらったのだが、なぜか源二郎もやってきて同席した。国政の両親は怪訝に感じたらしく、「源二郎はお盆の供養をしなくていいのか」「もうお墓参りには行ったの？」などと尋ねたが、源二郎はまるで上の空で、「はい、はい」と答えるばかりだった。

【読経が終わると、源二郎は待ちかねたように国政を表へ引つ張りだした。そのまま荒川の土手を下り、自分の船に乗りこもうとする。勢いに引きずられ、源二郎のあとをついて歩いていった国政は、さすがに足を止めた。日はまだ高い。

「どこへ行くんだ」

「花枝を迎えに行くんだよ」

「約束の時間は、午後一時じゃない。午前一時だぞ」

「早めに向こう岸に着いておかないと、花枝が待ちくたびれて帰っちゃうかもしれないぞ」

それにしたって、出発するのが早すぎる。荒川は大河ではあるが、黄河やアマゾン川ではない。半日まえから渡りはじめる必要はないだろう。

国政は源二郎をなだめた。

「気持ちちはわかるが、まあ落ち着け。だいいち、なぜ俺を迎えに同行しなきゃいけないんだ？」

「冷たいこと言うな。幼なじみだろ」

幼なじみとして、俺はすでに十二分に活躍したはずなのだが。国政は包帯を巻いた自身の左手に視線を落とした。 * ロクに噛まれた傷跡は、まだじくじくと痛む。こんな目に遭いながらも、花枝が家を脱走してくるよう算段をつけてやったのだ。もうお役ごめんにしてほしいところだったが、源二郎はめずらしく弱気な目で国政を見ている。

① しかたがない、つきあってやるか。

国政は小さく首を振り、時間を持ってあましている源二郎に指示した。

「花枝さんが乗るんだから、船の掃除をしろ。途中で船ごと流されたらことだから、エンジンの点検も忘れるな」

源二郎は素直に言いつけに従い、船のエンジンにオイルを差したり、船底を掃き清めたりと、花枝を迎える準備をした。国政はそのあいだ河原に座っていた。手もち無沙汰なので、小石を川へ投げ入れ、波紋が広がる様子を眺める。源二郎は張り切りすぎて、エンジンが

空回りしそうなほどオイルを注ぎこみ、船底が摩擦して穴が空きそうなほど激しく箒を動かした。

作業を終えた源二郎は、国政の隣に腰を下ろした。かと思ったら、次の瞬間には立ちあがり、着ていた紺色の浴衣を脱いでふんどし一丁になった。国政はなにごとかと驚き、源二郎を見上げた。源二郎は堂々たる足取りで荒川に踏み入り、向こう岸を目指して泳ぎはじめた。

国政は呆然と源二郎を見送った。当時はまだ、公害という言葉も耳慣れぬもので、荒川の水も澄んでいたが、流れは名に恥じず荒々しく逆巻いていた。源二郎は少し下流に流されつつ、向こう岸についた。休むまもなく、源二郎は身をひるがえし、腕で水を切ってこちらへ戻りだす。

国政は日差しに首筋を灼かれながら、源二郎が帰ってくるのを待った。国政がいる岸に泳ぎついた源二郎は、全身から水を滴らせ、息を荒らげて仁王立ちした。

「……なにをしてるんだ、おまえは」

国政はあきれて尋ねた。

「じつとしていられねえんだよ」

と源二郎は答えた。

源二郎の体力にかかれば、船いらずだ。花枝さんを肩車して荒川を渡ればいいんじゃないかと、国政は思った。源二郎はふんどし姿のまま、河原に寝ころがった。熱せられた石をもとせせず、仰向けからうつぶせへ、うつぶせから仰向けへと体勢を変え、濡れた体を乾かしている。

やおら源二郎は立ちあがり、浴衣を羽織って帯を締めながら言った。

「じゃ、日付が変わるころに、ここでな」

そのままさっさと土手を上がり、自宅のほうへ歩いていく。

本当になんなんだ、いったい。河原に取り残された国政は、思いきり力をこめ、大きめの石を十個ほど次々に川へ投げ入れた。なぜ俺が同行せねばならんだ。まったくもって②理不尽な源二郎の行いである。】

とはいえ国政は律儀なので、源二郎の頼みを無下にはできない。柱時計が深夜十二時を打つころ、再び荒川へ向かった。源二郎はすでに船に乗って待っていた。昼間に着ていたのと同じ、紺の浴衣姿だ。きちんとした身なりのほうがいいだろうと、俺はパリッと糊のきいた白いシャツを着てきたというのに、花婿のおまえが浴衣というのはどうなんだ。

そう思いはしたが、いまさら言っても詮ないことだ。国政と源二郎を乗せた小船は、対岸を目指し、荒川へと漕ぎだしたのだった。

午前一時を過ぎても、花枝はやってこなかった。岸にもやった船のへりを、さざ波が打つ音がする。ときどき鮒かなにかが跳ね、月に鱗を光らせる。

家を抜けでるのに手間取っているのだろうか。ご両親に見つかってしまったのではあるまいな。国政はいらいらはらはらし、月明かりのもと、はじめてのボーナスで買った腕時計をたしかめた。③針はもどかしいほどゆっくり動く。 午前一時五分だ。

「おい、政」

しびれを切らした源二郎が言った。「おまえ本当に、ここに一時と花枝に言ってくれたんだろうな」

「言ったぞ」

ひとまかせにしていたくせに、疑われるのは不本意だ。国政はむっとして答えた。

「花枝さんが、なにか勘違いしているんじゃないか」

「なにをう。花枝をまぬけみたいに言うな」

「そんなことは言っていない。気になるなら、ちよっと様子を見てこいよ」

「俺がこのこ行ったら、花枝の親父とロクの餌食になっちゃうだろうが」

「それぐらい、たいしたことではあるまい。俺などおまえのおかげで、すでにロクの餌食になってしまったんだぞ」

国政と源二郎が言い争いしているところへ、深夜に似つかわしくない華やいだ声が降ってきた。

「お待たせしました、こんばんは」

仰ぎ見ると、土手のうえに花枝が立っている。うれしそうに微笑み、国政と源二郎に向かって手を振っている。月に照らされた花枝は、とてもきれいだった。川まで駆けてきたのか、淡く桜色に上気した頬。白い半袖シャツがほのかに光り、長く艶やかな黒髪が夜そのもののようだ。

天女の降臨を目撃した気分で、国政は河原に突っ立っていた。紺色のスカートの裾が動き、花枝は土手を下りはじめた。危なっかしい足取りだ。こんな調子で、子どもたちに体育を教えられるんだろうか。案の定、花枝は斜面で盛大につまずいた。なんとか転びはしなかったが、半ば落下する感じで、足をもつれさせながら河原に下り立った。

隣で同じく突っ立っていた源二郎の脇腹を、国政は肘で小突く。源二郎は活を入れられたように「はっ」となって、花枝に近づいていた。④夢遊病者の足取りである。 夜だというのにまばゆそうな表情で、源二郎は花枝が持っていた靴を黙って受け取った。四角い小さな旅行鞆だ。あんなものに、身のまわりの品がすべて入るとは思えない。本当に身ひとつで、花枝は源二郎のもとへ来たのだ。

愛だけをたよりに。

花枝がいかに本気がうかがわれ、国政はこみあげてくるものがあつた。うつくしい女に心から慕われているのだと思うと、幼なじみがうらやましいようにも誇らしいようにも感じられた。

(三浦しをん『政と源』より)

(本文に一部表記の変更があります。)

(注) 荒川＝東京都・埼玉県を流れる河川。

堀切＝東京都葛飾区かつしかの町名。

ロク＝花枝の実家で飼われている犬。

(一) ———線部①「しかたがない、つきあつてやるか」とありますが、このときの国政の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いち早く花枝を妻に迎えようと行動する源二郎の心意気に胸を打たれて、たとえ源二郎が冷静さを欠いているように最後まで協力してやろうと思う気持ち。

イ 半日も前から花枝を迎えようと行動を起こす源二郎が、実は花枝を迎えられそうにないと自信を失いかけている様子を見て、自分が守つてやろうと思う気持ち。

ウ 花枝を早く迎えたいという気持ちちが行動に現れている源二郎の、普段は見せない姿を見て、幼なじみとしてももう少し協力してやろうと思う気持ち。

エ 花枝を迎えたい一心の源二郎の、普段からは想像もできない姿を目の当たりにして、幼なじみとしてどこまでも関わつてやろうと思う気持ち。

(二) ———線部②「理不尽な源二郎の行い」とありますが、源二郎のどういう行動が理不尽だと国政は考えましたか。それを説明した次の文の□に入る最も適当なことを、それぞれ本文中の【 】の部分から、①は八字、②は二字で抜き出さない。

すでに約束の取り付けと昼間の源二郎の行動で □① □② のに、さらに約束の時間にも無理やり □② □① させようとする行動。

(三) ———線部③「針はもどかしいほどゆっくり動く」とありますが、このときの国政の様子として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 伝えた時間が過ぎ、いまだに花枝が現れないことにいら立ちながらも、この源二郎と花枝が結ばれない状況をどう打開するか考えを巡らせている。

イ 落ち合う時間を過ぎたのに姿を見せない花枝に源二郎への愛はなかったのだと考え、幼なじみとして今後どのように源二郎と関わつていくのかを深く考えている。

ウ 伝えた時間を過ぎて、花枝が源二郎と落ち合う場所に現れないことにいらつき、実家から出ることに失敗したのかと心配しつつも、このあとどうしていかか考えている。

エ 落ち合う時間に現れない花枝に対して不信感を募らせるものの、実家から出ることを失敗したのだと捉え、このあとどう花枝を連れ出すか考えている。

(四) ———線部④「夢遊病者」とありますが、源二郎のどういう様子を表していますか。それを説明した次の文の□に入る最も適当なことを、本文中から五字で抜き出さない。

夜にもかかわらず、まばゆい □ を見たような夢心地な様子。

(五) 本文中の国政と源二郎の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国政は、幼なじみの行動に翻弄されつつも、幼なじみの行く末を見過ごすことのできない実直な性格で、源二郎は、惚れた女性を思い、無下に扱わないようにするものの、落ち着くのが苦手な性格である。

イ 国政は、突発的な行動をする幼なじみにあきれつつも、大事な幼なじみの願いなら全力で応えようとする真面目な性格で、源二郎は、花枝のことを第一に考え、国政の話には耳を傾けない自分勝手な性格である。

ウ 国政は、落ち着きのない幼なじみに冷やかな目を向けるも、自分を理解できる人間だから大事にしようとする友だち思いな性格で、源二郎は、花枝と自分を引き合わせてくれた国政に感謝をする真面目な性格である。

エ 国政は、幼なじみの行動にはあきれかえるものの、幼なじみの頼みには応じざるを得ない律儀な性格で、源二郎は、冷静さに欠けるが、国政の声が届かないほど花枝に愛情を抱いている一途な性格である。

(六) ……線部「こみあげてくるものがあつた」とありますが、何が国政にこみ上げてきましたか。現れた花枝の様子を明らかにして、本文中の□を用いて、六十文字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題五〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

同じことばを何度もくりかえし使うと、いかにも語彙が貧弱なように見える。井上ひさしは『自家製文章読本』で「上品なスペイン語の文章では一頁のなかに同じ単語が二度あらわれてはならない」とされることを①紹介し、「谷崎は『文章』について語っているつもりで、実は『形式』について」と書いた後、「語っている」という表現を避けて「云々していた」と結ぶなど、みずから実践してみせた。フランス語でもそういう美意識が強いと、遠藤周作の小説『おバカさん』に登場するガストンのモデルという仏人のネラン神父に聞いたことがある。

夏目漱石の初期作品にそういう配慮の跡がア目だつ。『②倫敦塔』に「只一度倫敦塔を見物した事がある。其後再び行こうと思った」と書いて、次を「日もあるが」と続け、「一度で得た記憶を二返目に打壊すのは惜しい、三たび目に拭い去るのは尤も残念だ」と展開するくだりなど、極端な例だろう。事がある／日がある、一度／二返目／三たび目、打壊す／拭い去る など、今ではいささかこだわりすぎて感じられるかもしれない。

目だたず、隠し味となっている箇所も多い。『吾輩は猫である』の書き出しの文末の響きに注目したい。「吾輩は猫である。名前はまだ無い」と始まり、改行して「どこで生れたか頓と見当がつかぬ」と続く。この文末は③なぜ「つかぬ」としなかったのだろう。段落の切れ目はあるものの、直前の文が「無い」で終わっているからではないか。それは形容詞であり、次が「つかぬ」と「ない」で終わっても、こちらは助動詞だから文法上は別語であり、同語の反復にはあたらない。しかし、品詞こそ違え、否定の意味を共通しており、無縁なことばではない。それでも漱石がイこだわったのは、ナイという同じ音の連続となって、文末の響きが単調になるのを避けたかったからだろう。

日本語では文を述語で結ぶ。その述語の多くは動詞か形容詞・形容動詞で、終止形がすべて動詞はウ段、形容詞はイ音、形容動詞は「だ」で終わる。名詞述語文も名詞のあとに「だ」か「である」が付く。敬体にしても「です」や「ます」になり、過去形にウすれば、すべて「た」か「だ」になってしまう。そういう言語的な制約があって、④日本語の文章は文末の音がきわめて単調になりやすい。その点、猫のこの書き出しは「……猫である。……まだ無い。……見当がつかぬ。……記憶している。……見た。……であったそうだ。……」という話である」と続き、日本語としては奇跡的と思われるほど、文末がきわめて多彩である。

鎌倉の自宅を訪問したあの日、永井文学における省略の問題を話題にすると、「省略過多になる一つの原因として、同じことばをくり返し使うまいとしていることがある」と、永井龍男は「短編に同じことばが出てくるのは興ざめ」で、自分でも原稿用紙「二、三枚のうちと同じことばを二度使っちゃいかんぞ」と戒めながら書いていると語った。

その折、文末が多彩なものもそれと通じるのではないかと、「桜はすでに満開を過ぎていた。そこへ昨夜の吹き降りで、雨は止んだが、風は相当強い。雲が多く、半島全体が照ったり曇ったりしている。海は一面の風波だ」という『風』の冒頭近くを例にあげて、「同じものを二度使わないという配慮をここにも感じる」と水を向けると、この作家はいくぶん照れくさそうに表情を崩した。

ごく自然にエ見える文章の中に多彩な文末表現が実現していることを知り、練達の士の文章力に驚嘆する。なお、この少し前にも、「海沿い」と「沿岸」、「温泉場」と「温泉町」など、明らかに同語の反復を回避したと思われる類義語による言い換えの箇所が見える。

(中村明『日本語の作法』より)

(一) 線部①「紹介し」と同じ活用形の動詞を、本文中の——線部ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(二) 線部②「倫敦塔」の作者は夏目漱石ですが、④作者名と⑤作品名の組み合わせとして適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア (A) 芥川龍之介 (B) 地獄変)
イ (A) 樋口一葉 (B) たけくらべ)
ウ (A) 島崎藤村 (B) 風の又三郎)
エ (A) 森鷗外 (B) 高瀬舟)

(三) 線部③「なぜ」と、——線部が同じ品詞になっているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今夜、重大な発表があるらしい。
イ ある日の出来事について語る。
ウ とてもかわいらしい子猫を飼う。
エ たとえ壁があっても、乗り越えよう。

(四) 線部④「日本語の文章は文末の音がきわめて単調になりやすい」を文節に分けると、いくつになりますか。漢数字で答えなさい。

(五) 線部「練達の士の文章力に驚嘆する」とありますが、筆者は具体的に練達の士の何に驚嘆したのですか。それを説明した次の文の□に入る最も適当なことばを、それぞれ本文中から、①は六字、②は五字で抜き出しなさい。

日本語の文章には

①

があるにもかかわらず、

②

をしないように多彩な表現を用いていること。